

私の読書日記

H-84

アウシュヴィッツ、大英帝国、  
脳とグリリア細胞

ノンフィクション作家  
立花隆



×月×日

立教大学と東京大学のゼミ生有志とともに、アウシュヴィッツを三日間にわたって探訪してきた。東大生の一人が、「あまりに予備知識がありすぎたせいか、何を見てもショックを感じない自分にショックを感じた」というのを聞いて、ショックを受けた。おそらく予備知識をいちばん持っていたのは私だったろうが、私は現場を踏み、現物を見、生証言を聞くことで、いい知れぬショックをうけたところだったので、そのような感想をもらす者がいるとは信じられない思いがした。私が特にショックを受けたのは、ガス室の中で数百名の人々がいちどきに死んでいくさまが、驚く

ほどリアルにミニチュア・プラスチック模型で表現された展示だった。その前日、ガス室の死体処理係の回想録、シユロモ・ヴェネツィア『私はガス室の「特殊任務」をしていた』（河出書房新社 2000円＋税）を読み終えたばかりだった。「ああ、あの回想録の通りだ」と思った。

「人体組織の抵抗力で目が眼窩から飛び出した人もいました。身体じゅう出血している人もいれば、自分や他人の排泄物で汚れている人もいました。恐怖とガスの効力で、犠牲者は身体の中のものを全部排出することが多いのです。（略）みんな苦しんで死んでいました。普通の人は、ガスが注入されて、はい終わりと考え

るでしょう。でも、なんという死か！……よく見ると、お互いにしがみついで、少しでも空気をとみんな必死だったんですね。床に落ちたガスから酸が発散するので、みんな空気がほしくなる。そのために、最後のひとりが死ぬまでみんなお互いの上をよじ登ろうとする」

その言葉通りまるで運動会の棒倒しのように、天井の空気穴めがけてもがきあい手足をひっぱり合い重なりあいながら人間ピラミッドを作るようにして死んでいた。その一体一体が苦悶の表情を浮かべている。ガスの注入から全員死亡まで十五分ないし二十分だった。断末魔の悲鳴が徐々に弱くなり、無音になるのを待って、特殊任務部隊が中

に入り、からみ合った死体を一体一体引き離し、焼却炉に運んだ。遺体の口を開き、金歯をしている者からは金歯を抜いた。ガス室の中に入ることを許されたのは、特殊任務部隊員だけだった。彼ら自身も三カ月ごとにガス室で処分され、秘密が保持された。生き残り数十人だけがガス室の中で起きたことを証言したが、あまりのおぞましき故に、その詳しい実情はこれまであまり表に出なかった。本書は二〇〇七年にフランスで出版されると大ベストセ

ラーになり、世界十五カ国以上で翻訳されている。

これを読まずにアウシュヴィッツに行っていたら、私も東大生と同じように、私も東大生と同じように、ガス室や焼却炉の残骸を見ても、犠牲者の髪の毛の山や遺品の山を見ても、本や映画で見たことと同じと思っただけ、あまりショックを受けなかったかもしれない。

これまでも特殊任務部隊員の証言はあったが、本書はインタビュアー（フランスの若い女性政治学者）の巧みな誘導によって、リアリティのレベルがまるで違うものになっている。これを読んであらためて、書物の力というものを感じた。ホロコーストに関しては、クロード・ランズマン『シヨアー』（作品社 2800



私はガス室の特殊任務をしていた

円十税)、ギッタ・セレニ  
ー『人間の暗闇 ナチ絶滅  
収容所長との対話』(岩波  
書店 4200円十税)など  
世評の高い書物がすであ  
るが、読ませる力は、本書  
が抜きんでている。

×月×日

ジャン・モリス『帝国の  
落日』(講談社 上下各24  
00円十税)がついに出版。  
『パックス・ブリタニカ』  
(二〇〇六)、『ヘブンズ・  
コマンド』(二〇〇八)と  
続いできた大英帝国史三部  
作がついに完結したのだ。  
それぞれ上下巻からなるの  
で、全部で六冊、総ページ  
数千枚に及ぶ大冊である。

ジャン・モリスは、いつ  
てみれば、イギリスの司馬  
遼太郎。一八三七年のヴィ  
クトリア女王戴冠式から、  
一九六五年のウィンストン  
・チャーチルの葬儀にいた  
るまで、百三十年にわたる  
大英帝国の歴史を、驚くほ  
ど面白いエピソードを並  
べ、瞬時も読者をあきさせ  
ることなく語っていくその  
筆力はまさに司馬遼なみ。  
ヴィクトリアが戴冠した

ときには、英国は五万平方  
マイルの島に一四〇〇万人  
の国民が住むにすぎないヨ  
ーロッパの中小国家だっ  
た。国民の十人に一人は貧  
民で、薄暗い工場では八、  
九歳の子供が十二時間労働  
にはげんでいた。後に急速  
な産業革命を通じて、「世  
界の工場」となり、紡績工  
業製品で世界の市場を圧倒  
し、世界の富をかき集め、  
ロンドンを世界の金融セン  
ターにした。ついには、領  
土を次々に広げ、ヴィクト  
リア女王在位中に、世界の  
全人口の四分の一と世界の  
陸地の四分の一を支配する  
超大国となった。

大英帝国の支配のもと、  
世界全体がある安定を保ち  
ながら繁栄と平和を満喫し  
ていたのが、一九世紀後半  
の「パックス・ブリタニ  
カ」の時代。二〇世紀に入  
ると、その大帝国が、二つ  
の世界大戦を経て見るも無



『帝国の落日』

残に崩壊していくことにな  
る。その大崩壊過程を描い  
たのが『帝国の落日』だが、  
これが面白い。大英帝国の  
解体には、日本の果たした  
役割が大きかった。日本の  
大東亜共栄圏構想は、イン  
ドから香港まで、ビルマ、  
マレーシア、シンガポール  
など、大英帝国のアジア部  
分がそっくり重なっていた。  
日本の戦争意図にはは  
じめから打倒大英帝国があ  
った。しかし英国人もほと  
んどのアジア人も、英国は  
無敵だし、無敵でありつづ  
けると思ひ込んでいた。そ  
の思い込みを破ったのが、  
四二年二月のシンガポール  
陥落だった。「帝国の無敵  
神話を粉砕したシンガポー  
ル陥落」の章を読むとわか  
るが、日本軍がすぐ近くま  
で迫っても、誰も英軍が日  
本軍に負けるとは夢にも思  
わず、みなダンスや茶会、  
ゴルフにうち興じていた。

しかし、「シンガポール陥  
落」という出来事によって、  
二世紀にわたる確信が粉碎  
され、これ以降、アジア人  
がそれまでと同じ目で英国  
人を見ることは二度となく

なった。「当時の英国人  
は、第二次世界大戦の意味  
が完全には理解できていな  
かった。真に凶暴な敵を滅  
ぼそうとしているつもりだ  
ったが、じつは同時に自分  
たち自身と自分たちの伝統  
をも滅ぼしていたのだ」

イギリスは第二次大戦の  
勝者となったが、戦後間も  
なく、帝国の要石だったイ  
ンドを失い、その後帝国全  
体が解体していった。大英  
帝国は消えたが、イギリス  
はその後も大国の一員とし  
て世界をリードし、シテイ  
は世界の金融センターとし  
て機能しつづけている。

しかし、松藤民輔『20  
11年ユーロ大炎上! 日  
本経済復活の始まり』(講  
談社 1600円十税)は、  
そのイギリスの繁栄ももう  
終わりだと説く。イギリス  
の対外債務は、GDP比3  
40%というとてもない  
額に達しており、現在の金  
融危機のトップの座にある  
のはギリシア(ユーロ)で  
はなくイギリス(ポンド)  
だとする。リーマン・ショ  
ック以来ポンドは売られつ  
づけ、いま歴史的ポンド安

の事態になっている。世界  
の投機筋がみな次はイギリ  
スだと考えはじめているの  
だ。松藤はときどき怪しい  
こともいうが、リーマン・  
ショックの前後、ソロスと  
ならんで、一番正しく事態  
の推移を予測していた。

×月×日

ユニークな脳科学の本だ  
と思ったのは、浅野孝雄・  
藤田哲也『ブシユーカーの  
脳科学』(産業図書 360  
0円十税)。

従来の脳科学は、脳をニ  
ューロンのかたまりとら  
え、脳機能はニューロンが  
作る回路のネットワークに  
よって営まれているとして  
いる。それに対して本書は、  
脳の半分はニューロンでは  
なく、グリア細胞なのだか  
ら、グリアを無視した脳科  
学は不完全という。グリア  
細胞もネットワークを作っ  
ており、グリア・ネットワ  
ークとニューロン・ネット  
ワークの間のクロストーク  
にこそ、脳活動の最も謎と  
されてきた本質的な部分、  
すなわち心とか無意識の世  
界を解く鍵があるとする。

『ほくの血となり肉となった五〇〇冊』として血にも肉にもならなかつた一〇〇冊(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。